移り行く混迷の時代に　2

pinokopapa

人々の生活に役立つものを作って成長していくという、この何気ない考え方には、お金でお金を儲けようという考え方はありません。ものを作れば、市場の洗礼を受けます。さらに、物を作ることからの技術の蓄積も得ます。すべてが、例えば企業なり、製作者の努力に依るものです。株式市場の、単なる思惑の先読みではありません。お金でお金を儲けるのが資本主義の本義であるならば、金融資本主義は究極の資本主義かもしれませんが、その意味で、ものつくりにこだわる日本人の考え方は、この資本主義のあり方から離れているように思えます。

先日APPLEの創業者、スティーブジョブスの伝記映画が放送されておりました。彼こそ、時代を作ったカリスマでありました。彼と同時代を生きてAPPLEコンピューターをみてきた我々は、この伝記映画を見るまでもなく、アメリカという国の可能性と在り様を、つまり、この映画の題名通りの、スティーブジョブスの光と影を見ました。時代を飛び越えた、普通には理解し得ない先進的なアイデアをもった天才の次々と生み出してゆくものを、同時代人として見てきたのです。初代Macintoshは、コンピューターのポルシェと言われ、あこがれはしても、その高価さと高性能なことで手が出せない代物でした。そして、彼の生きざまはアメリカの光と影であり、アメリカ資本主義の最もダイナミックな時代でありました。もっとも、Appleは今もiphone,ipadなどの今までなかった物を作り出しております。しかし、ジョブズなきAppleは次を作り出せていない。Appleはジョブズの遺産で繁栄しているにすぎません。ここにも時代の行き詰まりを見る思いです。

しかし、それがアップルの限界と批判するものではありません。資本主義が行き詰まっているのは、資本主義自身が求めたルールの書き換えにあるということが、ジョブズ氏の光と影にも描かれています。ファンドから派遣された取締役がジョブズ氏を追放する要因は、四半期の決算が赤字になったことでした。さらにIBMと真正面から角突き合わせることでのリスクを回避したいという経営上の判断もありました。ジョブズ氏は人が人らしく生きるのに手助けになるものを作りたいというのをポリシーとして、マックを作りました。それが開発に多額の費用が掛かった、販売台数が思ったほど伸びなかった、世の中がいまパソコンからミニコンへ移ろうとしている、といった理由から、創業者のジョブズを追放します。しかし、それが誤りでした。アップルの低迷は三年続き、株価は最低値を更新し続けます。そのころジョブズ氏はネクストというPCを作っていました。これは宣伝こそされていませんでしたので、世に知られておりませんでしたが、その全貌はiMacから続く、新生アップルの製品に乗せられたOSから知ることが

できます。
　アメリカにとって、成長はつねのものでなければなりません。たとえ四半期一期でもマイナスになることは、あってはならないことなんです。つねに利益をうみだすことが求められています。ジョブズ氏のように、三年の期間をかけて、新しいものを作り出すなんて、許されないのです。ましてや、その三年が赤字であればCEOが解任されます。日本ではそう言ったことは、ある程度黙認されているのではないでしょうか。良いものを作る、それが尊敬される社会であるということです。金を生み、利益を手にする、それが一番大事で、そのためには何でもする競争社会がアメリカです。ステイグリッツ氏のいう書き換えられたルールがこれです。光と影は、二〇一二年、アップルは株価で世界一価値のある会社になったとエンドタイトルで流します。日本人はこれを素直に、おお素晴らしいと受け取れないところがあるのではないでしょうか。宙に浮くディスプレイのiMac、iPodからiPad、iPhoneを作り出した会社だからすばらしいとは思ってもです。

混迷の時代の続く資本主義ですが、原因は需要不足だと経済学者はいいます。消費者に消費を促す商品がないことも一因でしょう。しかし、ジョブズ氏のような天才が作り上げたデバイスは時代を切り開き、瞬く間に万人に受け入れられたインフラになってしまいました。もう人はスマホをあって当然なものとして考えていますから、なくなりはしないでしょう。昔は、例えばテレビ，洗濯機、冷蔵庫などの家電製品がそれでした。今年の異常な暑さには、クーラーを適切に使いましょうと、ニュースで呼びかけられております。これもあって当然なものになっているのでしょう。

　需要不足の原因は、グローバル化によって、あらゆる国が黒字をむさぼっているからだという人もいます。トッド氏がそうです。やすやすと国境を越えた資本は、人口ボーナスにわいた低開発国に進出して、商品を作る際に一番費用の掛かる人件費の削減を図り、そこから利潤をむさぼります。そして、この国家の枠を超えた資本の自動運動が、結果として国家の枠内におさまり、国の成長という形で比較されます。そして、赤字を垂れ流し、各国に黒字を提供している国からは、失業を輸出していると言われ、格差を生むことにもなりました。

　ジョブズ氏のような天才のいない日本は、部品製作の下請け国になりはてています。ですから、ジョブズ氏の無理難題をかなえた日本のソニーやシャープは、課題を与えら

れるとそれを解決することはできても、Macは作れませんでした。iphoneでもしかりであることは、説明するまでもありません。しかし、日本は、家庭用ゲーム機を作り出し、ゲームは世界を席巻したのでした。ですから、信じたい。そう思うだけです。

今の時代は、あの頃と似ていないでしょうか。「あのころ」と何となく状況が似ているような気がします。今の時代への不安と不満がつのっていって、学生という一番敏感な部分が爆発した、あの頃です。もっとも、いまの学生には、何かをやろうとするなんて気持ちはかけらもないように見えます。体制に順応し、懸命に就活に奔走するが、自分以外に興味はなく、スマホの画面を見つめ、その狭い世界が彼らのすべてと言わんばかりです。ちょっと横を向いてみろ、そこにも人はいるぞと言いたい。あなたたちと同じ人がいるぞ。

そういっても、一億総保守化が今の日本。

チャーリー・パーカー、ビリー・ホリディ、レイ・チャールス、エルビス・プレスリー、ホイットニー・ヒューストン、マイケル・ジャクソン、そして一時期のマイルス・デービス。これらの名前で、何を連想いたしますか。エルビスを除いて、皆、ジャズの人たちです。しかし、ここにエルビスをいれましたのと、マイケル・ジャクソンも入っています。彼らはアメリカという国の大スターでありました。当然、大富豪でもありました。まさにアメリカンドリームを叶えた成功者でもありました。なのに、皆、薬物で命を削り、自殺するようにして死んでゆきました。彼らほど成功した人はいなかったと思いますのに、なぜ、彼らは実を削って死んでいったのでしょう。単純に考えつくのは、人種差別と、回りの卑しむ目です。彼らのお金に人々は頭を下げても、心を許しあうことはしなかったのでした。アメリカは人種のるつぼですから、黒人だってイタ公だって、たくさんいますから、それで充分だったのではないかと思われますが、黒人であれば、黒人はアメリカ社会のエスタブリッシュメントではありません。アメリカを本当の意味での価値観を確立している階級ではないのです。彼らは疎外された人々でした。ビリーホリディのストレンジ・フルーツは、多分今でも彼らの場所を表しているということです。マイケル・ジャクソンの様々なスキャンダルが喧伝され、誤ったイメ

ージが作られたことを目の当たりにしてきました。ホイットニーはなぜ、あんな死に方をしなければならなかったのでしょう。そして彼女の娘のご乱行はどうでしょう。金に群がってきていると分かっていても、金目当ての男にすがらなければならない寂しさがあるのだとおもいます。誰でしたか、そんな人が日本にもいました。それゆえ、アメリカ資本主義の矛盾がとは軽々に言いたくありません。かれらをむしばんだものは正体をみせず、普通の人たちも加担しているのですから。絶望への道は善意で飾られているといいます。パンドラの箱に残っていたものは希望。希望は、より深い絶望をあじあわせるための罠だともいいます。人と人の闘いを調整する手段が民主主義であるならば、国家は、とまでかんがえてきましたが、世の片隅で生きていたものには、この先は分かりません。

彼らの心の平穏を奪ったのは、そんな単純なものだったのでしょうか。ほぼ致死量に近い睡眠薬、いや、麻酔薬を専用の医師に注射させて死んでいったマイケルは、なぜ眠れなかったのでしょう。ビリーホリディは、なぜ酒と薬をやめられなかったのか。レイチャールズもマイルスも薬に手を出したのか。それがアメリカ社会の闇なんでしょうか。

人は、人の中でしか自己を実現できないと言った人がおりました。それ自体、ほかの誰かの言葉かもしれませんが、小林秀雄氏が何かの文章にそう期しておりました。しかし、彼らは他人に支持され、認められもしておりました。それでも、彼らの心は満たされなかった。他人は自分がどこに属しているのか、誰とつながっているのかを確認し続けるというのが、他人の中での自己実現の具体化であろうとおもいます。孤立した自分を意識したとき、他人は不安にさいなまれます。よく、お金で買えないものもあると言います。そうかもしれません。愛の実現にお金は必要でも、愛自身はお金では得られなかった。それが、彼らを孤立させた。そんなふうに見えます。自滅し、崩壊してゆく人たちが何を考えていたのか、想像も付きません。もっとも、成功してなお強く生きている他人のほうが断然多いのですから、なにをか語らんですが、欲望は満たされることなく、膨らんでいくのが常のようです。

経済学は人の欲望をもとに、世の中がどう動くかを考察する学問だとかんがえます。これは経済学に限らず、社会科学全般においても同様で、人間の欲望を考察するのですから、そこには考察する側の価値観がどうしても入り込みます。事実とデーターがあり、結果があれば、それに付いての解説はできます。しかし、その解説には価値判断が付きまとい、事の善悪さえ言いだします。すると、その価値判断の基準は何か。それが研

究者の価値観と無縁であるはずがありません。理系の学問は現象とその要因を突き止めれば、結果は一つです。そして、何より実験ができます。さらに、再現性があります。そこに研究者の価値観は入り込めません。それでも地球は動くのです。しかし社会科学は実験ができません。そして要因を突き止めたと仮説を立て、社会にそれを適用しての再現実験もできないのです。一見事実の羅列に過ぎなく見えても、歴史は社会科学に関係なく動いてゆきます。ですから、経済学は化学かという疑問はつねに投げかけられます。ケインズは、経済学など歯医者の技術ぐらいにしか過ぎないと言い放ちました。それでも彼は、経済恐慌を起こさないようにする技術は生み出しました。

日本でマルクス経済学がメインロードを歩けたのは、逆に、そこには一見研究者の価値観から離れた真理があるように見えて、なおかつ、強烈な価値観があったからでした。今虐げられた人々が社会の支配者になって国家を支配するということが歴史の必然であるという理想が語られ、証明されていた故でした。そして、プロレタリア独裁は必要であるとも説きました。それがソ連でのスターリンによる粛清、また、中国の文化大革命、ポルポトの人民に対する大虐殺の正義になりました。

経済学は、経済政策を立案するだけの高みにまでしか達していないとも言われます。そのための分析と説明は行われるのですが、そのさきの問題解決のための政策は結局その社会のどこかに偏ったことしか行えません。マイナス金利はお金を必要としているだろう分野にとってはつごうのいいものでしょうが 、利子を奪われ、財産の目減りを強いられて犠牲になっているものも存在することになります。経済学は悪いことをしてはならないと、ステイグリッツ氏はいいます。政府の大義名分を言いつくろわせる程度の科学が、今の経済学です。結局、先のことなど分からないというのが、結論でしょうか。欲望の資本主義の結論がこうでした。そして、結局、ひとが変わらなければ、世の中は良くならないという、分かり切った結論でもあるとおもいます。

なにか憑かれたように考えてきましたが、こんなところまでしか達せられませんでした。なお考えるところがあれば、考えてみたいとおもっています。